

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 8 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26284017

研究課題名(和文) 基礎資料に基づく南方熊楠思想の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive research on Minakata Kumagusu based on primary source

研究代表者

松居 竜五 (Matsui, Ryugo)

龍谷大学・国際学部・教授

研究者番号：40238952

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,500,000円

研究成果の概要(和文)：2006年に和歌山県田辺市に開館した南方熊楠顕彰館との連携に基づき、一次資料に基づく研究の確立をおこなった。2015年3月には『熊楠研究』9号(1～8号、1999～2006年の後継誌)、2016年に10号、2017年に11号を刊行した。2015年には南方熊楠研究会を発足し、会長・運営委員・編集委員を確定して、8月初旬の研究例会の成果を翌年3月の『熊楠研究』に発表する体制を確立した。これと並行して、松居は2016年12月に『南方熊楠 複眼の学問構想』を刊行し、「ロンドン抜書」の目録や関連書籍における書き込みデータを公開するなど、熊楠の学問形成の過程について実証的に跡づけた。

研究成果の概要(英文)：In collaboration with Minakata Kumagusu Archives in Tanabe, Wakayama, we have established the research on Minakata Kumagusu based on primary sources. In March 2015, we restarted the publication of annual journal, Kumagusu Studies, with the 9th vol., which was followed by the 10th in 2016 and 11th in 2017. We also founded the Society for the Research of Minakata Kumagusu in 2015, run by the Chairperson, Committee, and Editorial Board, which organize the annual research meeting in August and published Kumagusu Studies in March. Matsui has published "Minakata Kumagusu--a Multiple Intellectual Perspective" in which the the formation of Minakata's knowledge and thought is empirically examined, with the list of "London Extracts", which shows the books he read in the British Library and the marginal notes of his former library.

研究分野：比較文学比較文化

キーワード：南方熊楠 民俗学 博物学 仏教 データベース 文化人類学

1. 研究開始当初の背景

(1) 南方熊楠の略歴

南方熊楠(みなかた・くまぐす、1867-1941、以下主に「熊楠」と表記)は、幼い頃から博物学に志し、10代前半の頃に『訓蒙図彙』から『和漢三才図会』にいたる近世日本の百科全書を読み込んだ。また、『本草綱目』や『大和本草』などの伝統的な東アジアの本草学書を筆写している。16歳で上京し、東京大学予備門に入学したが、19歳で退学し、富裕であった父の許しを得て海外遊学の決意を固め、1886年に日本を離れ、米国・英国で十数年間の学問的研鑽を積んだ。

サンフランシスコに着いた熊楠はパシフィック・ビジネス・カレッジで語学などを学んだ後、ミシガン州ランシングのアナーバーの農学校に入学するが、一年間で退学し、その後は自学自習により西洋近代思想と自然科学を学んだ。フロリダ・キューバでの植物採集の経験を経て、1892年にロンドンに渡る。翌年、26歳の時にロンドンで*Nature*誌に「東洋の星座」を発表し、その後*Notes and Queries*誌への投稿も開始、生涯に375本の英文論考を発表した。またロンドンでは、大英博物館において東洋学、人類学を中心とした稀覯書の筆写をおこない、52冊の「ロンドン抜書」を作成している。

1900年に33歳で帰国してからは、植物学と民俗学の分野で活躍した。真言宗の僧侶であった土宜法龍に対する手紙の中で示された仏教的世界観と近代科学の融合を図った斬新な思想は、「南方マンダラ」と称されている。1905年頃から田辺に定住して結婚し、家庭を持った。1909年以降は明治政府の神社合祀令に対する反対運動をおこなっているが、エコロジーという言葉を用いた自然環境の保全を訴えた先駆的な活動として評価されている。この頃から柳田国男との文通を開始し、『郷土研究』や『太陽』などに民俗学の論文を発表するようになった。また、「田辺抜書」と呼ばれる漢籍や仏典の筆写ノート60冊を残している。1929年には昭和天皇の田辺行幸に際して、当時の民間人としては異例の生物学に関するご進講をおこなっている。1941年に田辺市中屋敷町の自宅で死去した。

(2) 没後の資料調査について

こうしたユニークな学問活動にもかかわらず、大学や研究機関に所属していなかった熊楠の学問的業績は、没後は十分に後継されることなく、その資料の多くは、未整理のまま和歌山県田辺市の旧邸などに放置されていた。1965年に和歌山県白浜町に南方熊楠記念館が設立され、資料の一部が移管されたが、展示中心の施設であり、本格的な資料調査はおこなわれていない。

一方、出版に関しては、1950年に乾元社版全集12巻、1971~75年に平凡社版全集

12巻、それ以降補遺的な著作群が公刊されているが、これらを総計しても、既刊分は熊楠が書いた文章全体の半分程度に過ぎない。日記、草稿・書簡・ノート・抜書・蔵書・遺品・標本などの資料の多くが、没後の長い期間、文字通り手つかずのままに残されていた。この背景としては、熊楠の肉筆が膨大かつ難読、時に数か国語にわたるために翻刻と読解がなかなか進まなかったことが、大きな原因として挙げられる。

本科研の申請者と共同研究者を中心とするグループによって、資料所有者であった長女の南方文枝氏の依頼と田辺市の援助を受けて、1992年頃から南方熊楠旧邸の調査が始まった。その後計7度にわたる科学研究費(1993~1994年度奨励研究A、1996~1998年度基盤研究A、2000~2003年度基盤研究B、2004~2007年度基盤研究A、2008~2010年度基盤研究B、2011年度~2013年度基盤研究B、2014年度~2016年度基盤研究B、1996-1997年を除いていずれも松居が研究代表)などを通じて基礎研究を充実させてきた。1999年から2006年にかけては、毎年『熊楠研究』を刊行し、資料調査に基づく関連論文や資料の発表をおこなった。

これらの邸内資料調査の最終的な成果は『南方熊楠邸蔵書目録』(2004年)および『南方熊楠邸資料目録』(2005年)としてまとめられた。また、この間、田辺市の南方邸だけでなく、白浜町の南方熊楠記念館の調査もおこない、1997年に『南方熊楠記念館資料目録』を刊行している。旧邸資料の保存に関しては、2002年に南方文枝さんが亡くなった後に、田辺市が隣地を購入し、研究施設の建設が進められた。その結果、2006年に開館した南方熊楠顕彰館にすべての邸内資料が移管され、一般に公開する体制が整えられた。この顕彰館では、学術部を中心として関連の刊行物の作成や、展覧、講演会の組織などもおこなわれている。

(3) 本研究にいたる資料公刊について

この間、資料の公刊という面でも、さまざまな進展があった。特に本研究との関連では、共同作業によって熊楠のすべての英文論文が完訳されたことが大きいだろう。まず『ネイチャー』掲載分の51篇と関連論文が、飯倉照平監修、松居竜五・田村義也・中西須美訳『南方熊楠英文論考(ネイチャー)誌篇』(集英社、2005年)として刊行された。

また、南方熊楠に関する未公刊の資料の発掘と刊行も相次いだ。熊楠がアメリカ時代に留学生仲間の廻し読みのために執筆した「新聞」である「珍事評論」と、ロンドン時代に公使館宛てに送りつけた戯文「ロンドン私記」が発見され、長谷川興蔵・武内善信校訂『南方熊楠 珍事評論』(1995年、平凡社)として出版された。これにより、二十代前半から三十歳前後までの熊楠の、過剰とも言える自意識に満ちた自己語りの世界が明かに

された。

2004年には、鶴見和子の「南方マンガラ」評価以来、熊楠の思想的な根幹部分として考えられてきた土宜法龍宛の書簡が、新たに43通発見されるというできごとがあった。これらは、詳細な注釈とともに奥山直司・雲藤等・神田英昭編『高山寺蔵南方熊楠書翰 土宜法龍宛 1893-1922』（藤原書店、2010年）として刊行され、既存の飯倉照平・長谷川興蔵編『南方熊楠 土宜法竜往復書簡』（八坂書房、1990年）に収録された23通の熊楠の書簡と、31通の土宜の書簡と合わせて、両者のやりとりがかなりの程度わかるようになった。さらに、南方熊楠顕彰館および南方熊楠記念館から、植物学における弟子である小畔四郎、平沼大三郎、榎山嘉一に宛てた熊楠の書簡が翻刻・刊行されている。

熊楠の日記については、平凡社版『南方熊楠全集』の編集社であった長谷川興蔵の手によって、従来1885年～1913年分、つまり十七歳から四十六歳の前半生の部分が八坂書房から『南方熊楠日記』全四巻として刊行されていた。これに加えて、南方邸資料調査の際に、女婿の岡本清造がその後の1922年、五十五歳時までの分の粗翻刻をおこなった原稿が残されていることがわかった。また、1923年以降の日記に関しては、東京、関西、田辺の三つの研究会で、分担して翻刻を作成することとなり、現在作業が進行している。つまり既刊分以外の日記についても、一定程度の翻刻原稿が存在し、それ以外の未翻刻分についても、現在では南方熊楠顕彰館でスキャン画像が公開され、閲覧できるようになっている。

(4) 本研究開始時の状況について

以上のようなかたちで、資料研究会の調査後に刊行・公開されてきたさまざまなテキストを概観し、さらに現在の研究状況についての情報を提供するために編纂されたのが、松居竜五・田村義也編『南方熊楠大事典』（勉誠出版、2012年）である。この事典では、邸内資料調査に参加したメンバーを中心として、計三十八名が「思想と生活」「生涯」「人名録」「著作」「資料」「年譜」の六部構成で、研究に必要な事項を執筆した。記述のそれぞれに関してはできるかぎり詳細な典拠を付しており、南方熊楠の研究に関して、必要な情報を集大成した事典として活用できるものである。また巻末には、松居が作成した詳細な年譜が付されており、経年順に熊楠の事蹟をたどることができるようになっている。こうした共同作業による基礎資料の整備とともに、個人によるさまざまな研究によっても、質量ともに多くの成果が挙げられてきている。特に、2000年代以降は、『熊楠研究』や顕彰館の機関誌『熊楠ワークス』上を中心として多くの注目すべき研究論文が執筆され、研究書の刊行も相次いだ。これは、新たな資料がアクセス可能になることによって、

より多角的な分析が可能になってきたことが大きな要因であると言えるだろう。

2. 研究の目的

以上のように、2006年の南方熊楠顕彰館の開館と、これにともなう一次資料の公開を受けて、熊楠に関する研究環境は大きく整ってきたとすることができる。本研究ではこうした流れを踏まえて、研究者のネットワークを強化し、さまざまな分野からのアクセスが容易となるような方向性を強く打ち出すことを最大の目的とした。

前述のように、南方熊楠の学問は日記、草稿・書簡・抜書・蔵書・遺品・標本などの資料として残されているが、その多くが没後の長い期間、文字通り手つかずのままに残されていた。この背景としては、熊楠の肉筆が膨大かつ難読、時に数か国語にわたるために翻刻と読解がなかなか進まなかったことが、大きな原因として挙げられる。

特に資料刊行の中心的部分である日記に関しては、平凡社東洋文庫での刊行について合意し、1914～1922年の翻刻原稿は完成しているものの、最終的な原稿のチェックに手間取り、期間中に刊行することができなかった。また、熊楠は民俗学、文学、仏教学、植物学などの研究者に対して、論文に匹敵するような学問的な内容を文通のかたちで記述し続けた人物であるが、こうした書簡の中には未刊行のものも多く、全体像は把握されていないのが現状である。さらに、熊楠の学問を支えた抜き書きの中で重要な「ロンドン抜書」（1895-1900年に大英博物館などで筆写された52冊のノート）と「田辺抜書」（1909年以降に田辺で筆写された60冊のノート）に関しては、簡単なデータベースは作成済みであるものの、内容の詳細な分析についてはようやく緒に就いたところであった。

本研究では、このような研究の状況を踏まえて、南方熊楠の未刊著作の翻刻・編集作業を進めることと、こうした資料に立脚した実証的な研究展開を図ることを、両輪として展開していくことを目的の一つとした。まず、南方熊楠日記の1923-1941年分について、東京・関西・田辺でこれまで行われてきた研究会で翻刻した分をまとめ、さらに未解読部分の翻刻原稿を作成する。さらに書簡類に関しては、小畔四郎、上松翁、雑賀貞次郎、古田幸吉などに宛てた分の翻刻を進める。このうち小畔と上松は粘菌研究の弟子にあたり、すでに既刊書にかなりの部分がまとめられているが、そこから漏れた書簡も多く残されている。雑賀貞次郎は田辺在住のもっとも近い弟子で、これまで断片的にしか書簡が紹介されていない。古田幸吉は熊楠の従弟にあたり、神社祭祀で協力関係にあったが、未紹介の熊楠書簡も含めて、古田からの来簡とともに往復書簡のかたちでまとめる必要がある。

また、「ロンドン抜書」「田辺抜書」関連書簡の網羅的な調査・翻刻作業を行う。このう

ち、「ロンドン抜書」は、1895-1900年に熊楠が大英博物館で作成した52冊のノートであるが、英・仏・独・伊・羅などの多言語を含み、書き込みなども難読の部分が多い。これに関しては、研究代表者の松居竜五を中心として研究会での読解を進めて目録を作成する。また、「田辺抜書」は1909年から晩年まで、熊楠が田辺で行った60冊の抜き書きノートであるが、東京および関西の研究会で読解を進めて目録を作成する。

こうした資料整備と並行して、研究面ではそれぞれ毎月開催している東京・関西での研究会における共同作業を維持しつつ、8月初旬に顕彰館で行っている合宿研究会を拡大して、南方熊楠研究会を発足させる。このことにより、各地域の関連の研究者がかならず顔を合わせて、研究上の情報交換や議論を行う場を確保し、共同研究を促進することにつながると考えている。また、顕彰館と協力して、南方熊楠に関わる研究発表を公募・審査し、この合宿研究会に招待することで、若手研究者の育成と研究交流を図りたい。さらに、毎回テーマを決めて講師を招聘することで、これまで必ずしも南方熊楠の研究に関わってこなかった研究者を巻き込み、資料調査の成果を学際的に発信する機会としたい。

さらに顕彰館では、上記のように学部を中心としてこれまでも講演会、奨励研究事業、展覧会などのかたちで一般に対する研究成果の公開を行っている。本研究の成果についても、適宜こうした場を利用することで、研究の裾野と他分野との交流を強化することとしたい。

3. 研究の方法

(1) RAの選定と翻刻のための研究会の開催

採択決定後、研究代表、研究分担者、連携研究者による共同研究者会議を開き、2014年度予算と作業内容について確認し、運営体制と日程の詳細について決定した。これまでの研究体制を支えてきた田村義也（成城大学非常勤講師）、志村真幸（京都外国語大学非常勤講師）の二名を研究支援者（RA）として雇用することとなった。

4月以降、東京と関西の二カ所において南方熊楠の日記を解読する翻刻のための研究会を毎月開催した。東京では約10名、関西では約15名の参加者が常にあり、田村と志村はそれぞれ出張して両方の研究会に参加した。これらの研究会においては、さまざまな研究関連の情報交換もおこなわれている。この研究会は、2014～2016年度の期間中、8月を除く毎月おこなわれて、それぞれ計33回開催された。研究会においては、東京では1931年分、関西では1927～28年分の日記の翻刻作業をおこなった。

(2) 『熊楠研究』の再刊行と南方熊楠研究会の発足

2014年8月6日・7日・8日に和歌山県田辺市の南方熊楠顕彰館において、科研のメンバーを中心として研究発表会をおこなった。この研究発表会では、奥山らが「南方熊楠と真言密教」をテーマとしたシンポジウムを開催し、この成果は2015年3～5月の顕彰館における同題の展覧に活用されている。資料調査報告として「田辺抜書」「ロンドン抜書」「アメリカ時代のノート」に関する発表を、松居、千本、田村、志村がおこなった。自由論題においては、発表者を一般公募し、畔上が司会に当たり、橋爪などが発表した。研究動向のセッションでは、松居が英語圏での関連研究状況を報告し、他に中国語圏・ドイツ語圏での状況についても報告がなされた。この研究発表会の成果に基づいて、2015年3月に『熊楠研究』第9号を刊行した。

2014年度から2015年度にかけて、本科研のメンバーを中心として、今後の長期的な視野の下での研究会の発足と運営について議論をおこなった。この結果として、2015年8月5日・6日・7日に研究会の例会を開催し、この際に正式に南方熊楠研究会を発足させた。8月5日には資料検討会をおこない、橋爪が「サイエンティフィック・メモワール」、松居が「ロンドン抜書」、RAの田村義也が白井光太郎関連書簡に関する成果報告をおこなった。8月6日午後には畔上がコーディネーターとしてシンポジウム「神社祭祀反対運動再考」を開催した。8月7日には『熊楠研究』第9号の合評会などをおこなった。また南方熊楠研究会総会をおこなって役員を選出し、会則を定めた。これらの成果を踏まえて、2016年3月31日に南方熊楠研究会編の『熊楠研究』第10号を刊行した。前記の例会における発表を中心として編集したものであり、畔上、田村、志村、松居が寄稿している。

2016年8月8日～10日に、和歌山県田辺市において第二回南方熊楠研究会を開催した。一日目の「研究動向」では松居が熊楠の主著「十二支考」の成立について発表を行うなどし、「合評会」では『熊楠研究』10号に関する講評を評者が行った。二日目の「公開シンポジウム」は「ロンドンの近代科学と南方熊楠」をテーマとして行われ、「自由論題」では公募の結果、選ばれた発表が行われた。三日目の「資料検討」では「田辺抜書」および私信類に関する発表が行われた。この研究会における成果については、9月より編集委員会の管轄の下に査読、編集し、2017年3月刊行の『熊楠研究』11号に収録した。

(3) 『南方熊楠英文論考〔ノーツアンドクエリーズ〕誌篇』の刊行

4月から7月にかけて、東京の集英社において、南方熊楠英文論考に関する研究会を開催し、松居、田村、志村などが出席した。この成果に基づいて、12月には、飯倉照平監修、松居竜五他訳『南方熊楠英文論考〔ノーツ

ンドクエリーズ」誌篇』(集英社)を刊行した。この著作においては、南方熊楠の300篇以上の英文論考の翻訳だけでなく、詳細な解説と、それらの論文が書かれた経緯や日本語著作との関連についての詳細な研究を付し、熊楠の活躍の舞台であったフォークロアに関する情報交換誌 Notes and Queries の英国内外における研究・文化史上の位置づけをおこなってもある。これによって、1978年に鶴見和子が『南方熊楠 地球志向の比較学』の中で「問答形式の学問」と呼んで指摘した熊楠の学問の方法論が、はじめてその全体像として把握できるようになったと考えている。また、これに関連して、『コトバ』2015年春号として特集「南方熊楠「知の巨人」の全貌」が刊行され、松居、田村、志村が寄稿した。

(4) 松居による研究と『南方熊楠 複眼の学問構想』の刊行

5月に松居が和歌山県田辺市の南方熊楠顕彰館と同白浜町の(財)南方熊楠記念館に出張し、すでにマイクロ化、デジタル画像化された資料の翻刻計画について説明し、調査の継続について依頼した。松居は5月から6月にかけて顕彰館において、関連資料の調査をおこなった。特に、南方熊楠旧蔵書中の Herbert Spencer の著書中の書き込み調査をおこない、これらを翻刻してデータベース化し、2015年3月に論文「南方熊楠蔵書中のハーバート・スペンサー著作に見られる書き込み」としてまとめた。

松居はまた2014年8月にロンドンに出張して、大英図書館などにおいて「ロンドン抜書」などの関連資料の調査をおこなった。この成果は2015年10月に東京大学大学院総合文化研究科に提出した博士論文「南方熊楠の学問形成」に添付資料として掲載し、これを改稿して2016年12月に出版した『南方熊楠複眼の学問構想』(慶應義塾大学出版会)に「ロンドン抜書目録」(pp.33-74)として公開した。

2015年6月には松居編の『南方熊楠の謎』を刊行し、この中で松居が第部「鶴見和子とその南方熊楠研究」を執筆してこれまでの研究史についてまとめた。また第部では、松居、田村などを中心として2004年におこなった鶴見和子を囲む座談会を収録している。これに関連して、7月30日の藤原書店主催の山百合忌において、松居が講演をおこなった。2016年4月には志村編の『異端者たちのイギリス』が刊行され、橋爪、松居、安田、志村が寄稿している。

2016年12月には、松居が『南方熊楠 複眼の学問構想』(慶應義塾大学出版会、計618頁)を出版した。全十章の長文の論考および、「ロンドン抜書目録」「ハーバート・スペンサー書籍への書き込み」からなるもので、日本語やアルファベットによる詳細な索引を付している。

(5) その他の研究関連イベント

2014年3月~5月に、千本英史が中心となって顕彰館において『和漢三才図会』展を開催した。4月29日には、これに関連して、小峯和明氏(立教大学名誉教授)、マティアス・ハイエク氏(パリ第七大学准教授)、鈴木広光氏(奈良女子大学教授)によるシンポジウムをおこない、『熊楠ワークス』にその模様を掲載した。10月10日に京都大学において「ロンドン時代の南方熊楠」と題したシンポジウムをおこない、この中でRAの志村真幸が発表、松居がコメンテーターとして発言した。2016年3月19日より5月5日までの予定で南方熊楠顕彰館において展覧「ロンドン時代の南方熊楠」をおこない、松居、志村などが構成を担当した。

2016年3月19日~5月5日に南方熊楠顕彰館において、「ロンドン時代の南方熊楠」展、6月3日~7月4日に「チャールズ・リード」展、7月16日~9月11日に「熊楠と熊野の妖怪」、10月1日~11月6日に「熊楠とゆかりの人びと 孫文」、2017年12月3日~1月8日に「新春吉例「十二支考」輪読 鶏に関する民俗と伝説」、2月4日~3月12日に「熊楠とゆかりの人びと 中山太郎」を行った。いずれも企画、パネル執筆、講演会などの一部に、本科研の分担者、連携研究者、RA、出張者などが関わっている。

4. 研究成果

前項(3)の『南方熊楠英文論考〔ノーツアンドクエリーズ〕誌篇』の刊行は、これまで重要性が指摘されていながらもアクセスが困難であった熊楠の英文論考の理解を大きく進めるものである。2005年度に刊行した『南方熊楠英文論考〔ネイチャー〕誌篇』と合わせて、熊楠の英文論考のすべてを翻刻したものであり、これによって27歳から始められた熊楠の初期の著作活動(邦文での主な著作活動は40歳以降)の全貌が明らかになった。今後の熊楠の学問形成の理解のための基板となるものであると考えている。

(4)の松居竜五『南方熊楠 複眼の学問構想』の刊行は、1990年代初めの南方熊楠邸調査の開始以来の研究成果をまとめており、今回の研究の大きな成果である。特に「動物学」、「課余随筆」、「ロンドン抜書」、「腹稿」などの草稿類や、蔵書への書き込みといった一次資料の調査を通じて、熊楠の学問形成の過程を分析した点に特徴がある。

一方、研究ネットワークの整備という面での本研究の最大の成果は、南方熊楠研究会を発足させ、機関誌としての『熊楠研究』の刊行を再開したことによって、資料に基づく実証的な研究を長期的に軌道に乗せたことにある。これまで、東京と関西の二つの翻刻研究会でおこなってきた研究活動について統合し、熊楠に関する研究者が一同に会して研究を進め、年次毎にその成果を刊行していくことの意味は大きい。また、2006年に開館し、

熊楠資料の9割程度を所有する南方熊楠顕彰館の活動と連携することにより、一次資料に基づきつつ研究をおこない、その成果を一般に還元するというサイクルを確実なものとしていることも、この研究会の大きな特徴として挙げることができる。

研究会の運営は、選挙によって選ばれる会長(任期2年)と、会長が指名する運営委員、編集委員によって進められる。2016年8月に定めた会則と、その後編集委員の手でまとめられた『熊楠研究』投稿規程により、会員に対して公正な運営がなされるようになっていいる。また、夏期例会においては、自由論題のセッションを設けて広く公募をおこなうとともに、シンポジウムでは他分野の研究者を招聘するなど、これまで熊楠の研究に関わってきたメンバー以外にも開かれた研究会となるための工夫がなされている。これにより、長期的な視野に立って熊楠の研究を深く広いものとして展開していく基盤が確立されたと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌]

安田忠典「海辺のクマグス第6回」『熊楠works』44、56-57頁、2014年

松居竜五「南方熊楠書中のハーバード・スペンサー著作に見られる書き込み」『熊楠研究』9、10-30頁、2015年

松居竜五「まぼろしの『南方熊楠全集』を構想する」『コトバ』No.19、30-35頁、2015年

安田忠典「海辺のクマグス番外編」『熊楠works』45、40-41頁、2015年

橋爪博幸「南方熊楠と『ポピュラー・サイエンス・マンスリー』」『熊楠研究』9、6-27頁、2015年

田村義也「作られた「熊楠伝説」」『コトバ』No.19、86-91頁、2015年

志村真幸「直筆で読む熊楠」『コトバ』No.19、36-45頁、2015年

松居竜五「南方熊楠研究の現在」『インターカルチュラル』14、101-107頁、2016年

松居竜五「書評：唐沢太輔『南方熊楠 日本人の可能性の極限』」『熊楠研究』10、279-283頁、2016年

安田忠典「海辺のクマグス番外編」『熊楠works』45、38-39頁、2015年

安田忠典「海辺のクマグス第7回」『熊楠works』46、62-63頁、2015年

安田忠典「映像作品『熊野路』の内容について(野村益三撮影「熊野路」と南方熊楠映像)」『熊楠works』47、46-48頁、2016年

畔上直樹「特集にあたって」『熊楠研究』10、8-11頁、2016年

奥山直司「申年 熊楠も木から落ちるか？」『熊楠works』48、22-27頁、2016年

広川英一郎、岸本昌也、田村義也【資料紹

介】南方熊楠顕彰館蔵、南方熊楠・岡茂雄往復書簡について『熊楠研究』10、214-278頁、2016年

松居竜五「C.H.リードから南方熊楠への来簡内容紹介と翻刻・解説」『熊楠研究』11、213-220頁、2017

橋爪博幸「標本鑑定にみる熊楠の交流関係 ウェブから今日の生物学者まで」『BIOCITY』70、52-59頁、2017

畔上直樹「南方熊楠と「現場からの声」 地域からみた神社合祀反対運動」『BIOCITY』70、90-97頁、2017年

[学会発表]

松居竜五「ハーバード・スペンサーと南方熊楠」日本国際文化学会、多摩大学、2015年7月5日

[図書]

飯倉照平、松居竜五、田村義也、志村真幸、南條竹則、中西須美、前島志保『南方熊楠英文論考〔ノーツアンドクエリーズ〕誌篇』集英社、891頁、2014年

松居竜五『南方熊楠の謎 鶴見和子との対話』藤原書店、282頁、2015年

石井正己編『博物館という装置 帝国・植民地・アイデンティティ』勉誠出版、391頁、2016年

松居竜五『南方熊楠 複眼の学問構想』慶應義塾大学出版会、618頁、2016年

志村真幸編『異端者たちのイギリス』共和国出版、513頁、2016年

志村真幸『日本犬の誕生』勉誠出版、237頁、2016年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松居竜五 (MATSUI Ryugo)

龍谷大学・国際学部・教授

研究者番号：40238952

(2) 研究分担者

畔上直樹 (AZEGAMI Naoki)

上越教育大学・学校教育研究科(研究院)・准教授 研究者番号：20315740

橋爪博幸 (HASHIZUME Hiroyuki)

桐生大学短期大学部・生活科学科・講師

研究者番号：40412978

奥山直司 (OKUYAMA Naoji)

高野山大学・文学部・教授

研究者番号：50177193

千本英史 (CHIMOTO Hideshi)

奈良女子大学・研究院人文科学系言語文化学領域・教授 研究者番号：50188489

安田忠典 (YASUDA Tadanori)

関西大学・人間健康学部・准教授

研究者番号：90388413

(3) 連携研究者 特になし

(4) 研究協力者 特になし